図書館だより
第14号
昭和57年11月10日
愛媛大学附属図書館

目　次

○図書館の思い出……1～2
○図書館を考える④……3～7
（ハワイ大学図書館……3～4）
（ロンドン大学図書館雑感……4～5）
（カリフォルニア大学〔デービス校〕にて……5～6）
（ドイツの図書館……6～7）
○図書館業務の電算化計画について……8～11
○昭和56年度愛媛大学附属図書館統計表……12
○愛媛大学附属図書館委員会報告等……13
○お知らせ……13
○図書館利用証の発行について……14

図書館の思い出

学長　坂上　英

地方の病院に勤務した2年余りの期間を除いて、卒業以来ずっと大学で過ごしてきたので、大学入学の年から数えると40年近く図書館のお世話になってきたことになる。

この長い年月の間に、いくつかの大学図書館や図書室をその時々の立場において利用させて貰ったので、それぞれの図書館についての思い出は少なくない。大学紛争当時、図書館が封鎖されたため苦労して通った他大学の図書館の思い出などもあるが、最も忘れられないのは学生時代の図書館である。

当時、京都大学の図書館は本部構内に建築中であったが、戦時中という困難な状況のもとにあったためか、コンクリートの外郭だけは出来上っていたものの内装が全く行われないままに放置されていて、仮の閲覧室は本部の建物の中にあった。おそらく法経4番教室とよばれる広い講義室の2階ではなかったかと思うが、あまり採光のよくないだだっ広い部屋だったように覚えている。

私はよくこの仮閲覧室に足を運んだが、専門の医学書をひもといた記憶は現在全く残っておらず、ただ書架に並んでいた鷗外全集や芥川龍之介全集などの中から勝手に1冊を取り出してぱらぱらと頁をめくり、高校時代に読み残したおもしろそうなものを見付けて席へ持ち帰っては、夕食までの時間を過ごしたことをよく覚えている。決して私が寸陰を惜しむ勤勉な読書家であったというのではなく、ただ医学部から下宿への帰途よく図書館に立寄ったというだけのことである。

そもそも、わが国の医学部専門課程の学生には

ごく少数の例外を除いて講義科目の選択ということは許されていない。すべて必修の講義ばかりであって、朝から夕方近くまでぎっしりと詰まった講義や実習のスケジュールをこなさなければならないのは、昔も今も変わりはない。しかも当時は食糧事情の悪い戦時中のことであって、学生のほとんどが外食を強いられており、私も講義が終ったのち図書館でいくばくかの時間を過ごしてから、西部構内にあった学生食堂で夕食をすませて下宿へ帰るという生活をしていたにすぎない。

今ふり返ってみると、このように図書館で過ごした時間は私には専門の講義をきいたあとの息抜きであったかもしれない。勿論、下宿へ帰ってからでも本を読むことができたわけであるし、このような中途半端な図書館の利用では読んだものの量も知れている。

しかしながら、このような時間の過ごし方をしたことが、その後の私の生活において、図書館に対して親しみを覚えるようになったとまでは行かないにしても、少なくとも図書館に足をふみ入れることに対して億劫さを感じないようにしてくれたことは確かである。その意味において、当時の仮図書館は私には懐かしい思い出である。

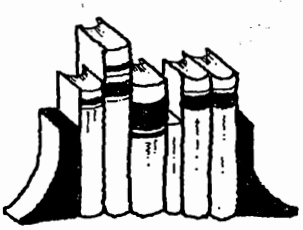
つぎによく思い出すのは、卒業後10年余りして留学した西ドイツ・ボン大学眼科教室の図書室である。医学部が大学のキャンパスからかなり離れたベーヌスベルクとよばれる丘の上にあったのでキャンパスの図書館にはとうとう足をふみ入れる機会がなかったし、また医学部にも特に中央図書館のようなものはなく、専門の図書はそれぞれ各教室に分散されて保管されていたようである。だから私の専門に関する図書はすべて眼科の建物の地下1階にある図書室で足りたのである。当時、この眼科教室はヨーロッパ随一の設備をもつといわれ、諸外国からの留学生も多く、ほとんどが院内居住を許されていた。私も院内に暮らしていたが、門衛から鍵を借りれば夜間でも自由に立入ることができたし、台帳に記入さえすれば借用することもでき、すべて教室員の自主的な管理に任されていた。私がこの図書室を忘れられないというのは、2年余りの留学期間中慣れ親しんだからというのではない。私が初めてこの図書室に入り、書架に並んだ欧米の新刊書を手にしたときの感激が25年たった今でも忘れられないということなのである。

第2次大戦の期間は勿論外国の学術書の輸入はほとんど途絶えていたし、戦後の復興期においても僅かにアメリカ文化センターでの学術雑誌の閲覧が許されたのみで、欧米の学術専門書に接し得る機会は極めて乏しかったのである。ところが、この図書室には戦時中のものをはじめ、戦後に出版された専門書がぎっしりと並んでいたのである。日本では見る機会もなかった新刊書を手にとって頁をめくる喜びと感激は、誇大な表現をすれば鎖国の垣を出て初めて外国の文物に接した時の驚きと喜びのようであったといえよう。まさに宝の山に入って、どれから手にしようかと迷うような気持ちがした。

勿論、ドイツは同じ敗戦国であり、しかも国土が戦場と化したわけであるから、戦時中の図書の疎開作業も困難をきわめたとのことであるし、また戦後の復興期における図書の整備も決して容易ではなかったと思われるが、これらの困難を克服して立派に学術専門書を整備している姿には深い感銘を覚えたのである。

以上、二つの図書館・図書室の思い出を述べたが、自分の体験を通して、1つには学生諸君が億劫がらずに図書館に入って本を読む習慣を身につけることが、将来にとって大きなプラスになるであろうということを言いたかったのと、もう1つは図書を整備する側の立場で、すべての図書とまでは行かないにしても、それぞれの専門分野での重要な図書は出来る限り購入して、これからの若い研究者に刺激を与えるとともに、その研究の進展に役立て得るように努力しなければならないということを申したかったわけである。

われわれの大学の新しく改修される図書館に、それにふさわしい内容の図書が整備されることを切に願う次第である。



図書館を考える……④

諸外国の大学図書館（等）を利用して

ハワイ大学図書館

影山　昇

昭和56年9月から10月にかけ、文部省在外研究員（短期）としてアメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市に滞在、州立ハワイ大学マノア地区構内にある国務省管轄になる東西センター文化学習研究所で、「ハワイにおける日系アメリカ人の世代交代と日本文化の変容」という題目をもって研究活動に従事する機会に恵まれた。

ハワイ諸島全域に及ぶ日系アメリカ人に関する文献や資料の所在解明、ハワイ大学図書館所蔵の「ハワイ諸島および太平洋諸地域関連文献・資料」中のハワイの日系アメリカ人関係のカタログ番号の調査作業も重要な活動であったので、図書館で過ごすことも多かった。

ハワイ大学図書館は2館あり、学部学生を主たる対象とするシンクレア図書館（Sinclair Library）と大学教官や大学院の学生を主たる対象とするハミルトン図書館（Hamilton Library）とがあり、後者の図書館を主として利用した。

学術担当の副学長の監督下に置かれている大学図書館長は図書館の管理や運営の責任の一切を委されており、学内での地位もきわめて高く、図書館人から選任され、その扱いは学部長とまったく対等である。したがって、もちろん全学の学部長会の正式構成員の一員であった。

館長に直結する事務担当の係は庶務と会計で、図書館の具体的な活動の企画や全体調整に当たる専任スタッフも置いていた。

図書館長秘書の役割も重要で、関係情報のすべてがここに集まり、館長の動きを全面的に支えている。

副館長は2名おり、学術面と運営面での担当をそれぞれ受け持ち、図書館職員の学内での評価も専門職としてきちんと位置づけており、大学図書館人の自分の仕事に対する誇りはまことに高いものがあった。

図書選択に関しては、大学教官と参考図書係の専門職員の手で行われているが、たえず蔵書の全体構成を専門にチェックする担当者（Bibliographer）がいることは興味深かった。

また、図書館に大きな特色をもたせるために特別コレクションに力を入れていた。

主要なものは、「ハワイ諸島関係資料コレクション」「太平洋諸島関係資料コレクション」「アジア諸国関係諸資料コレクション」で、専任の担当者を置き積極的に収書活動に励んでいた。

この他、「政府刊行物コレクション（Government Documents Collection）」「貴重書コレクション（Rare Collection）」にも力を入れており、ハワイ大学関係の文書や諸記録を系統的に収集しているのも図書館の仕事であった。

なお、「ハワイ諸島関係資料コレクション（Hawaiian Collection）」には州政府刊行物のすべてが委託保存されており、「政府刊行物コレクション」についても連邦政府から正規に指定された連邦政府刊行物の委託保存図書館を兼ねている。

さらに印象的であったのは、ハワイ大学が“州立”であるところから、州立図書館や州内の地域公共図書館とはすべてテレックスでつながれ、州内居住者への図書を中心とする奉仕活動に意欲的であった点である。

おわりに、東西センターとハワイ大学図書館との関係をみると、昭和35年にアメリカ合衆国の議

会立法で東西センター（East-West Center）は「アジア、太平洋諸地域、それにアメリカ合衆国との間の相互の理解をより深め、よりよい相互関係を維持・発展させることを目的」として設立された研究機関であるところから、太平洋のほぼ中央部に位置するハワイ諸島にあるハワイ大学構内に東西センターが創設された経緯からもうかがえるように、両者はまさに一体的な関係にあるといえよう。

そのことは、東西センター所蔵の大半の図書はハミルトン図書館に収められていることからも裏付けられる。

それだけに、ハミルトン図書館は、文字通りアジア・太平洋諸地域とアメリカ合衆国との密度の濃い文化交流による相互理解促進のための多様な研究活動を実質的に支える重要な役割をも果たしているのであるということができよう。

（昭和57年７月24日）

（教育学部教授・教育史）

ロンドン大学図書館雑感

小　室　輝　昌

本稿では、外国の大学の図書館の紹介と研究におけるその役割について記せとの事であるが、後者については、私共の属する実験科学の分野では、専門雑誌閲覧の上で不可欠なことは自明であり、その態様も、洋の東西を問わないように思われるので、前者について概略を記し、その責に代えたい。

さて、私の滞在していたロンドン大学には、厖大な書数と広さを持つ博物館の如き図書館本館があったが、大百科辞典のような趣で、利用頻度は余り高くないところから、これについては省略して、私が日常的によく利用した医学生物系の書籍を中心とした分館について以下述べることとする。

この分館は、機能的に分かれた幾つかの分室から構成されており、総て開架式であった。その内の１つは、小学校の教室を２～３合わせた程の広さで、索引雑誌、教科書的専門書、多少の一般教養的単行本を中心としており、それらが部屋の部分ごとに整理されていた。大型の机が部屋の長軸に直角に何列にも配置され、机上には向かい合わせの人間の独自性が保たれる様、頭の高さ程の衝立がしつらえてあった。学生達はこの部屋を一番良く使っており、参考書を用いてのレポート書きや空き時間の勉強に利用しているようであった。私も索引雑誌を使っての文献調べとか、居室を避けての物書きには、この部屋をよく用いたが、広くて静かな、良い勉強部屋であった。

第２の部屋は、この分館としての主体をなすもので、基礎医学系の研究者にとって必要な雑誌が網羅してあった。入口近くには、机２つ程を中心として最新着の雑誌のみが置かれており、手軽に次から次へと、自分に必要な論文を漁っていくことができた。これより奥の部分には、利用頻度の高い雑誌の20年分程が部屋の両側に並んでおり、閲覧する人間はその側に置かれた机に依って、論文を読んでいくことができた。更に古い分や他の雑誌類は階下の書庫に置かれていたが、これも自由に取り出せるところから、その時に主として読むべき雑誌書架の傍に陣取れば、能率よく仕事することが可能であった。学位論文提出前の若手研究者で、実験を終了し、論文執筆に入った人達がこの部分の常連で、半年ほどは毎日この部屋に入りっきりということも少なくないようであった。部屋としては、第１の部屋より多少狭く、机はいつもほぼ満員の盛況であったが、雑誌と真剣勝負の研究者が大勢を占めていることもあって、全くの静寂といっても良い状態であった。

更に、生物学一般を対象とした雑誌、臨床医学を中心とした雑誌は、それぞれ別の分室におかれていた。この様な分室の構成は、図書館利用対象者をその要求の質的違いによって分けることにより、騒音や煩雑さの徒らに生じることを避け、また利用者にとっては、必要な書籍を手近に、手軽に利用できるといううえで、中々良いシステムのように感じられる。

利用状況について、もう少しつけ加えるならば若手、中堅研究者では、概ね週に１～２度足を運

んで新着雑誌をチェックしているようであり、教授連では、実際に来館する頻度は少く、コンピュータサービスによる文献リストを抱えた秘書が雑誌を借り、必要論文をコピーしていくといった方法がとられているようであった。

他館にコピーを依頼しないで済む雑誌の豊富さは全く羨ましい程であり、そこまでは望めなくとも、本学での我々の如く、必要文献の6～7割は外部図書館に依頼するといった状況は、何とか早く脱却したいものである。

ところで、その他、附随的ながら大事な配慮と思われたのは、貸出・受付等の事務スペースを、これら閲覧室の全く外にとってあることであり、カードによる希望図書の探索も、ここで館員の補助を受けられることであった。精神の集中を極度に高めて、速やかな論文の理解に努めている研究者にとって、小声による会話やわずかな騒音も、時として非常に障害を来すものであり、このように、当然必要な会話や、必然的に生じる事務的作業音を閲覧室内に持ち込まないようにした配慮は大と言えよう。また一方、図書館員の方の立場からしても、閲覧室内では仲間同士の会話もままならず、作業音にも気をつかわねばならないとしたら余りにも非人間的職場と言えはしないだろうか。本医学部分館では、タイプやソロバンの音、時には比較的おおらかな笑い声が響いたりすることもあるが、上述の理由からも、個人の問題としてではなく、館内機構の問題として一考する余地があろう。

（医学部助教授・解剖学）

カリフォルニア大学（デービス校）にて

佐　藤　晃　一

ガラス扉を押して入ると、パイプゲート式の柵があった。柱を背にしたデスクに、ひとりのお嬢さんがにこやかに座っている。私は中に入るのをためらって、しばらく観察することにした。それは出る時にマゴマゴしても困るしと、本能的に(？)退路を考えたからでもある。学生達はひとりびと

りバッグ（大抵はナップザック）の口を空けて、中身をくだんのお嬢さんに見せ、身の潔白を証してから退館して行く。彼女は時にはザックのポケットまで調べ、ニッコリ笑って“オーケー”。図書の貸出はその後方に別の出口があり、3人の係員が利用者カードをチェックしながら処理している。ゲートを押して入ると1階はカード索引室、人名と書名のカード箱がアルファベット順に並んでいるのはいずこも同じである。奥の方には事務室と案内所。学生はほとんどがさっさと2階へ上って行く。階段下の壁は掲示板で、とび切り安いヨーロッパツアーの勧誘、アパートのルームメイト募集、ステレオ売りたし、などなどの情報が勝手にべたべたと貼られている。

15人のノーベル賞学者を擬するカリフォルニア大学には、デービスのほかにバークレイ、ロスアンジェルス、リバーサイドなど全部で9つのキャンパス(それぞれ独立した総合大学)がある。私は1980年11月から8ヵ月間、このデービス校に滞在した。ここは農学系が古くて、スタッフ陣もアメリカで5指に入る充実さである。1922年から1966年にかけて総合大学へと発展し、現在は農学及び環境科学、工学、文学及び理学の各学部（College）と、管理学、法学、医学、獣医学の大学院（School）から成っている。学生数17,400人で、1,400人の教官と6,000人の職員がいる。

一般に言われていることだが、アメリカの学生生活は非常に厳しく、特に医学など難しい専門を目指す学生は、土・日曜日は勿論のこと、毎日夜遅くまで勉強勉強で、遊ぶ暇は全然無い。週休2日制の国ではあるが、授業は土曜日にも行われる

ものがあり、実験実習の時間は夜10時頃まで組まれていることがある。デービスでも、学生生活を過度に(?)エンジョイしている者を見かけたが、とにかくD評価（わが国の不可とは異なる。評価Fでも合格ではある）を２つもとれば、たちまちカウンセラーに呼び出される。あなたには本学は合っていないようだから、他の（ランクの低い）大学に行きなさいと勧告されて直ちに退学。だから真面目な学生はいつも眼の色を変えて勉強している。（かと言って別に悲壮感はなく、快活かつ適度にエンジョイしているようであるが）その代わり勉学環境は非常に良く整えられており、カウンセリング指導も個々に行き届いている。特に図書館は充実し、本部図書館は24時間オープン。図書の貸出は10時までであるが、自習室が完備していて、どの授業でも出される山の様な宿題に対処できるようになっている。

デービス校の図書館は、本部図書館（Peter J. Shields Library）のほかに専門蔵書を主とする５つの図書館（例えば私たちが良く利用したPhysical Science Library、ここにはわが国の農業土木学会誌も送られて来ている。日本語だから読み難いということではあったが）と、各学科にいくつかの図書室がそれぞれあり、各種の図書、逐次刊行物、資料が納められている。本部図書館には、1980年現在で160万7,000冊の蔵書、18,700冊の稀書があり、政府その他の定期刊行物類は41,400、マイクロコピーに納められた論文類140万2,000、その他に膨大な量のパンフレット（小冊子）、地図、レコード類が利用に供されている。1970年には蔵書が82万冊であったから、年々の拡充ぶりは著しく、図書館協会の調べでは、アメリカの大学図書館94の内26位の充実といわれる。従って利用価値は高いが、利用方法が分からないと大変に困る。そこで、図書館における研究と図書検索入門に関する授業があって、新入学生はまず携帯用テープレコーダを耳に図書館ツアーをする。授業では図書や学術論文その他、いろいろな資料の探し方、借出し方から、文献のまとめ方まで、実に懇切丁寧に、実習させる。余談にはなるが、講義の聴き方、まとめ方、ノートの作り方、レポートの書き方なども授業として単位をとるようになっており、学習をさせるテクニックについても良く配慮されている。

本部図書館の２、３階が開架式の書庫、資料室で、各室に調査研修用の机が並べてある。利用者はここで調べ、必要ならば１枚５セントでコピーをする。多い時はコピーサービスを頼んで置くと割高ではあるが翌日に渡してくれる。さらに必要なら借出す仕組みである。館内は静かで、外では大声で陽気にオラビ合っている連中も、せいぜいヒソヒソ声の打ち合わせ程度。当然のことながらすやすや眠っている者も見受けるが、とにかく真剣にレポート作成に取り組んでいる。職員は実に親切で、トコトン親身になって助力することを務めとしている。私もヨーロッパ訪問国の大学・研究機関の情報を調べる折には、丸２日間付き合って貰い、有難かった。マイクロリーダーから、在庫の場所を知り、目的の書物、論文を発見することも慣れると大変容易かつ便利なものであった。しかし、何といっても一番良く利用したのは、２階の奥にある新聞、小冊子の室であったろう。そこには、日米両語の北米毎日と日米タイムスの２誌があり、サンフランシスコ経由の日本最新情報が、私達の旅の徒然を慰めてくれるものであった。

（農学部教授・土地改良学）

ドイツの図書館

小林漢二

ドイツがマルクス経済学の母国であるということは、今日では良く知られているところであろう。また、そのドイツがさまざまな社会問題に対応する国家の諸政策—いわゆる社会政策やこれについての理論的研究の母国であるということも、知る人は多いかもしれない。現在そのドイツは、“分裂国家”として東西相異なる体制の下にあり、その異なる道行きのなかで、この社会政策についての理論的、実践的な努力を続けている訳であるが、その今日における到達点—問題状況をかつての統一ドイツの時代における社会政策的諸事情を尺度として比較・検討することは、今日わが国でも国民

的課題の１つになっている福祉の問題―社会政策が国民の生活福祉をどこまで充実させることができるかという社会政策の可能性を確かめるうえできわめて重要な意味をもつといってよい。1980年12月から翌81年９月末までの在外研究をドイツ民主共和国に６ヵ月、ドイツ連邦共和国に４ヵ月と振り分けたのはその為であるが、しかし今日のわが国のマルクス経済学や社会政策論の研究水準・理論水準はすでに母国ドイツを凌ぐ高さにあるから、現地での仕事は専ら研究会や現地調査への参加とか、さまざまな機関または図書館での資料収集とかに集中することになる。その意味では、向うの図書館には随分お世話になった訳である。

東独（ベルリン）で世話になった図書館は大塚金之助教授（故人）の寄贈になる大塚文庫で名高い国立図書館（Volks Bibliothek der DDR）とフンボルト大学の図書館である。前者はフンボルト大学本館と並んで有名なウンター・デン・リンデン通りに面しており、後者は同じ大学の日本学教室のすぐそば、ウンター・デン・リンデン通りの裏通りに位置する。両者ともに古い伝統をもつことでヨーロッパでも有名であり、建物も後者は総大理石という豪華なものであるが、第２次大戦中、戦火を避けて疎開した数多くの貴重な蔵書が、戦後の分割占領―管理―独立という経過をへて、そのまま東西の国立図書館（西ベルリンの国立図書館は第２次大戦後設立された）に収まるという仔細があり、実際に索引カードにはあってもいざ貸出を請求すると、“紛失”という赤スタンプを捺されて戻ってくる事が再三であった。図書館の性格上、前者は一般市民の利用が多く、後者は研究者・学生の利用が圧倒的である。前者が月曜に休館、後者が日曜日に休館するのも、これを反映したものと思われる。利用方法は、しかし、両者ともに同じで、まず利用者登録係に出向いてパスポートを提示すれば名刺大の利用者カードを発行してくれる。後は、カード・ボックスで文献さがしをすれば良い訳であるが、いわゆる“キー・ワード”方式が導入されており、著者名・書名が分からなくても、問題領域別にカードが整理されているので、資料さがしには非常に便利である。一般の索引カードが著者名別・書名別と、いわゆる十進法式に整理されている点は、わが国の図書館と同様である。ただし、図書館ではそれが大きく1970年以前と以後に分けられており、索引室も違っていたのが印象的であった。貸出は、館内・館外別の書式に必要事項（書名・著者名・整理ナンバーおよび利用者の住所・氏名・職業）を記入し、それぞれの窓口に提出すれば、午前中に請求すれば午後、午後に請求すれば翌日午前中に借出せる（ただし、館外貸出の場合）。貸出期間は確か１ヵ月だったと記憶するが、もちろん延長も可能であり、また社会主義社会だけあってすべて無料である。ただし、館外貸出の場合は利用者カードを預けねばならない。コピーも可能である。しかし、コピー機の設置がきわめて限られており、また非合法印刷物の取り締まりという理由もあって、利用者が備えつけのコピー機を使って銘々でコピーするということはできない。図書館のコピー係にコピーを依頼し、用紙代を支払（１枚20ペニヒ）う訳であり、依頼して手渡されるまでの日数も最低２週間と、ちょっと考えられない程の日数がかかる。したがって、筆者もコピーはすべて東ベルリンに出向いて来ている日本商社の事務所に行って利用させてもらった次第である。

さて、西独で専ら利用した図書館は西ベルリンの国立図書館とミュンヘンの国立図書館（Bayerische Staats Bibliothek）の２つであるが、利用度は後者の方が圧倒的に高い。籍をおいたミュンヘン大学政治学研究所と同じルードヴィヒ通りにあり、歴史も古く蔵書数は西独随一といわれる。利用する為には、住民登録票が必要であり（３マルク50ペニヒ）、館外貸出の場合には30マルクの保証金が必要である。もちろん利用後には返却されるが、30マルクは中々の大金である。索引カードは、東ドイツの図書館と同じく著者名別・書名別の他に“キー・ワード”システムが導入されており、非常に利用し易い。コピーは、硬貨を挿入すれば作動する仕掛けになっており、コピー室で利用者がそれぞれコピーできるようになっている。ただし、１枚30ペニヒと街のコピー店よりほぼ80％がた割高である。蔵書に関しては、やはり戦火の為、一部消失した部分があり、たとえば戦前の諸政党の大会議事録などはきわめて限られていた。ただし、東独の図書館と異なり、消失した蔵書は索引カードから削除されている。戦後、市中の古本屋からだいぶ補充したということであるが、ドイツの図書館ほど文化を破壊する戦争のいまわしさを訴えるものは、他にはないのではあるまいか。

（法文学部助教授・社会政策）

（原稿の受け付け順）

図書館業務の電算化計画について

はじめに

本学図書館（本館、医学部分館、農学部分館）業務の電算化については、学内共同利用システム（研究、教育、図書館業務及び事務処理）としての愛媛大学情報処理センター構想の一環として計画されてきました。

本年１月、このシステムの概算要求が認められたのを機に図書館では、計画推進のための体制をつくり事前準備（現状分析、業務量調査、研修等）を開始しました。

そして、去る６月30日以降、本館及び両分館の若手職員を主体として編成したワーキンググループが中心となって電算機業者派遣のＳＥ（システムエンジニア）と稼動に向けて協議、打合せを行っています。

今のところ、閲覧業務を先発とし、来年４月からの本番に照準を合わせ、必要な事前の作業を進めています。

申すまでもありませんが、本学の図書館業務電算化の目的は、学術情報源としての図書館資料（図書、雑誌及びその他の資料）の収集、蓄積、提供を電算機を使って、より合理的に、効率的に、そして組織的に運用することを図るとともに、利用者サービス或いは、図書館管理業務などの機能を改善しようとするものです。さらには、昭和59年度後半以降に事業開始が予定されている学術情報システムの展開に対しても、ネットワークを構成するメンバーズライブラリーとして対応していくための一つの布石でもあるわけです。

対象業務と今後の開発計画

機械化対象業務は下述のとおりです。先発、後発の別はありますが最終的には日本語処理を含むトータルシステムを志向しています。

そして開発計画については、先発予定の閲覧システムを含むすべての業務についてパッケージシステム（名古屋大学の図書館システムを開発した経験を踏まえて電算機業者がつくった汎用ソフトウエアー）を導入することにしました。大きな特色だといえましょう。

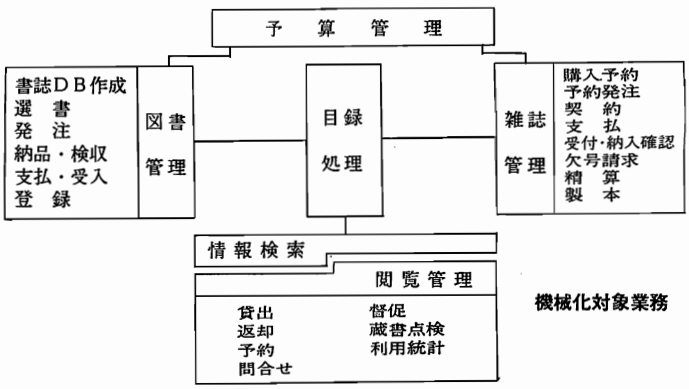
国立大学附属図書館で業務をコンピュータで処理している大学は、本年４月に稼動を開始した前述の名古屋大学を入れると約20大学にも達しています。仄聞するところによれば、そのいずれの図書館に於いてもシステムの初期開発作業に当っては、図書館、電算機業者ともに大変な時間と人的資源を投入してきました。

図書館はともあれ、企業体としてのメーカー側からすれば、ソフト経費は現在のところ認められていないことでもあり、これまでのように一館ごと、基本設計からシステムが安定稼動するまで長期間にわたって多数のＳＥを派遣しての支援体制は、やはり、転換せざるを得ないのかもしれません。いずれにしても、個々の図書館単位でシステムを開発して行く初期の開発時代は終ったわけで時代の流れだとうけとめています。

ともあれ、現在、本学閲覧システム設計のため、パッケージシステムとの“すり合わせ”作業を進めています。

対象業務と稼動予定

1.	予算管理	昭和59年４月以降
2.	図書管理	〃
3.	雑誌管理	〃
4.	目録処理	〃
5.	情報検索	〃
6.	閲覧管理	昭和58年４月

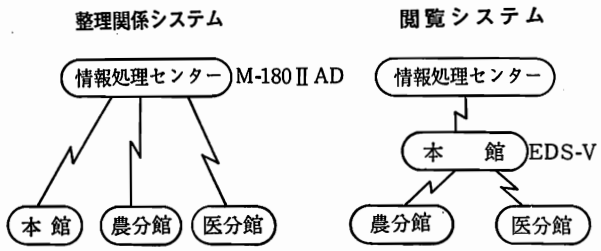


機械化対象業務

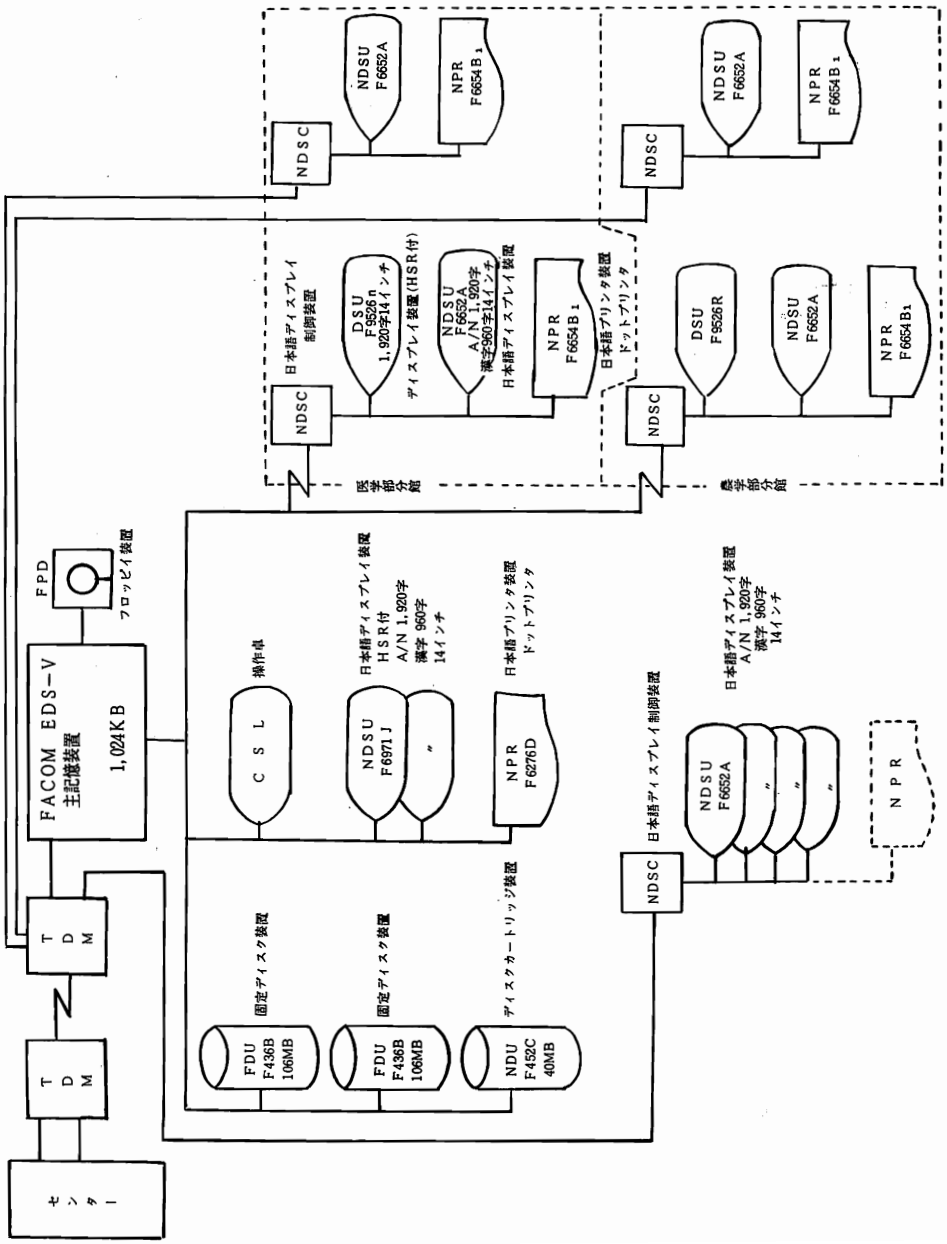
図書館システムを構築するについては、右の図のとおり整理関係業務はホストコンピュータ（M—180ⅡAD）側にシステムを構築し、即時処理として利用者サービスをする閲覧管理業務は、図書館独自のコンピュータ（EDS—V）側にシステムを構築する分散処理方式となります。理由は次のとおりです。

1. ホストコンピュータの利用状況（負荷状態など）に左右されない。
2. ホストコンピュータの運用（利用時間帯など）に左右されない。
3. ホストコンピュータがトラブルを起こしても閲覧管理処理は可能である。

システムの概念図



システムの機器構成図



閲覧システムの概要と進捗状況

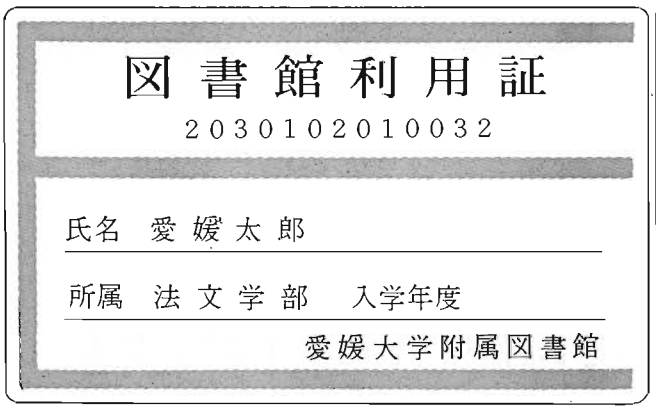
このシステムはＯＣＲ（光学文字読取装置）ハンド・スキャナで利用者コード・図書コードを読みとらせて貸出、返却等を行います。

したがって、利用者及び図書資料を予めコード化することが必要となります。

利用者に対しては利用者コードを付番した図書館利用証（図①）を昭和58年２月迄に発行する予定です。

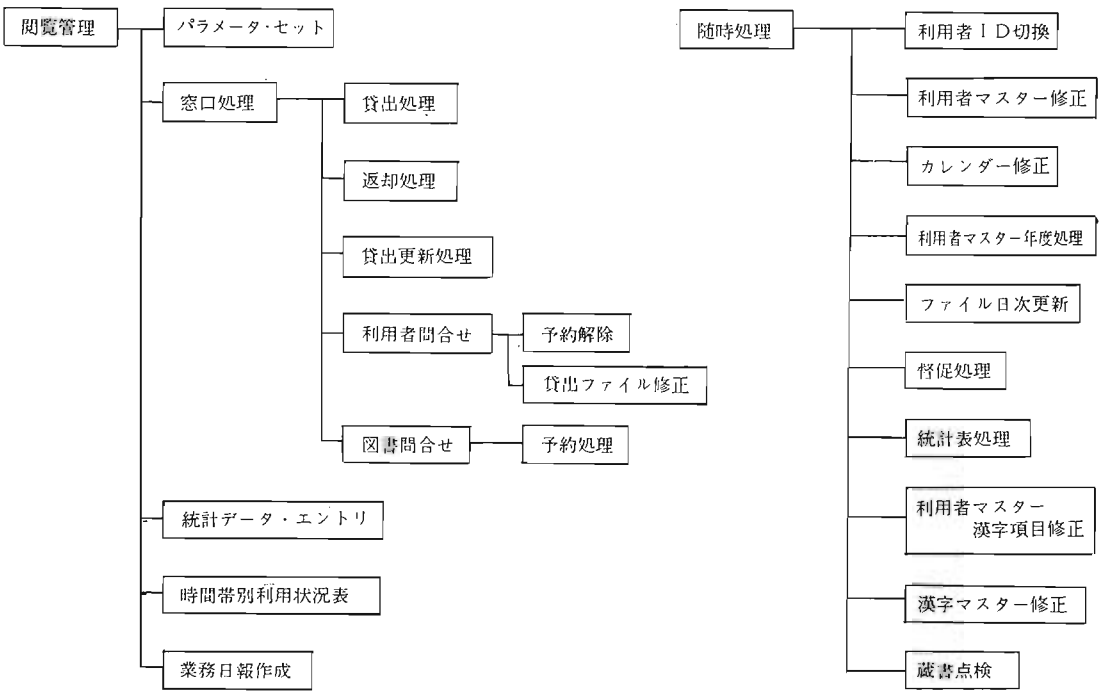
一方、図書資料については、第１段階として、利用度が高い開架図書（本館60,000冊、医学部分館10,000冊、農学部分館6,000冊）に図書コード（図②）を付番した図書シートを貼付しました。

①図書館利用証（13桁のコード）



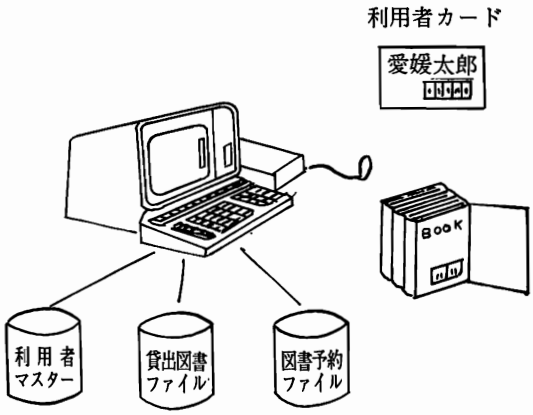
②図書シート（13桁のコード）

閲覧管理システムの体系



貸出処理

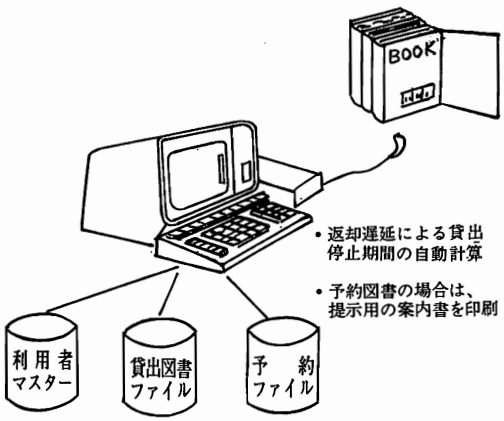
利用者ＩＤと図書ＩＤをＯＣＲハンド･スキャナで読ませることにより処理する。
貸出には、一般貸出と長期貸出処理がある。



- 利用者ＩＤの有効期限
- 貸出冊数制限
- 貸出停止中、罰則チェック
- 資料区分、利用者身分による返却日の自動設定

返却処理

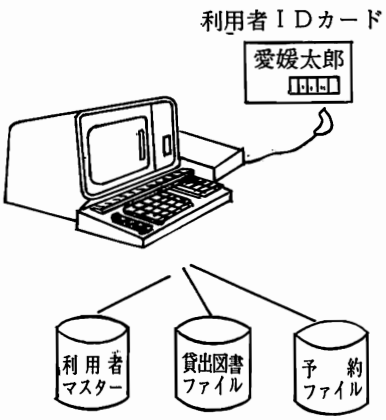
返却図書の図書ＩＤをＯＣＲハンド・スキャナで読ませることにより処理する。



- 返却遅延による貸出停止期間の自動計算
- 予約図書の場合は、提示用の案内書を印刷

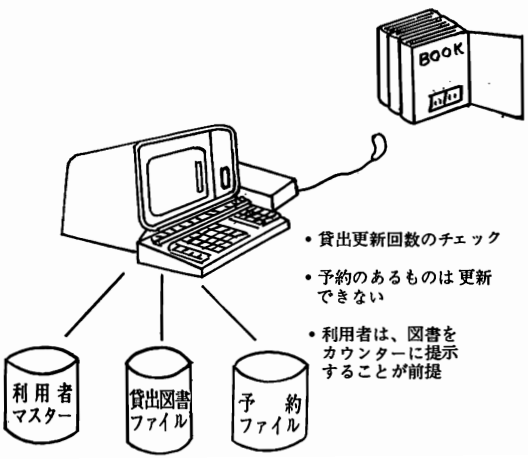
利用者問合せ

利用者ＩＤをＯＣＲハンド・スキャナで読ませることにより利用者の貸出状況、予約状況の表示を行う。
また、予約解除、返却日の修正が行える。



貸出更新処理

図書ＩＤを読ませることにより貸出期間の延長（貸出更新）を行う。



- 貸出更新回数のチェック
- 予約のあるものは更新できない
- 利用者は、図書をカウンターに提示することが前提

昭和56年度愛媛大学附属図書館統計表

蔵書冊数

区分	和漢書	洋書	計
本館	307,296冊	114,393冊	484,689冊
医分館	21,673	23,111	44,784
農分館	53,799	12,461	66,260
計	445,768	149,965	595,733

増加冊数

区分	和漢書	洋書	計
本館	24,183冊	5,876冊	30,059冊
医分館	1,328	1,838	3,166
農分館	1,731	439	2,170
計	27,242	8,153	35,395

受入雑誌種類数

区分	和雑誌	洋雑誌	計
本館	1,875冊	1,118冊	2,993冊
医分館	260	454	714
農分館	973	406	1,379
計	3,108	1,978	5,086

開館日数・入館者数

区分	開館日数	入館者数
本館	338日	500,040人
医分館	294	41,937
農分館	302	18,340
計	934	560,317

貸出冊数

区分	教職員	学生	その他	計
本館	24,655冊	75,208冊	239冊	100,102冊
医分館	8,131	9,180	35	17,346
農分館	3,663	9,714	0	13,377
計	37,831	92,720	274	130,875

貸出人数

区分	教職員	学生	その他	計
本館	23,261人	43,802人	68人	67,131人
医分館	6,182	5,941	14	12,137
農分館	2,753	5,938	0	8,691
計	32,196	55,681	82	87,959

研究室貸出図書冊数

本館	22,110冊
医分館	1,373
農分館	1,325
計	24,808

学内文献複写件数

区分	国費	私費	計
本館	669件	807件	1,476件
医分館	7,829	1,528	9,357
農分館	531	51	582
計	9,029	2,386	11,415

学外文献複写依頼件数

区分	依頼件数	謝絶件数	複写件数
本館	1,983件	108件	1,875件
医分館	4,894	481	4,413
農分館	412	24	388
計	7,289	613	6,676

学外文献複写受付件数

区分	受付件数	謝絶件数	複写件数
本館	1,171件	99件	1,072件
医分館	1,228	50	1,178
農分館	215	18	197
計	2,614	167	2,447

愛媛大学附属図書館委員会報告

昭和57年度第1回附属図書館委員会

日時：6月11日（金）　10：30～12：00

議題

(1) 今年度電算化計画について

(2) その他

報告事項

(1) 第30回中国四国地区大学図書館協議会について

(2) 昭和57年度国立大学附属図書館事務（部・課）長会議について

(3) 昭和56年度愛媛大学附属図書館統計について

昭和57年度第2回附属図書館委員会

日時：7月7日（木）　10：30～12：00

議題

(1) 昭和56年度学生用図書費及び後援会図書費の支出結果、並びに昭和57年度の推薦依頼について

(2) 外国雑誌の購入予算について

(3) その他

報告事項

(1) 第29回国立大学図書館協議会について

愛媛大学附属図書館委員会委員

（　）内は任期

附属図書館長	星島一夫	(昭59. 3.31)
医学部分館長	四宮孝昭	(昭59. 9.30)
農学部分館長	徳増智	(昭59.10.31)
法文学部	美山靖	(昭58. 3.31)
	福本茂雄	(昭59. 3.31)
教育学部	影山昇	(昭58. 3.31)
	白方勝	(昭59. 3.31)
理学部	松沢喜一郎	(昭59. 3.31)
	須賀正夫	(昭58. 3.31)
医学部	貴田嘉一	(昭58. 3.31)
工学部	矢野忠	(昭59. 3.31)
	近藤明	(昭58. 3.31)
農学部	稲岡恵	(昭59. 3.31)
教養部	山本篤司	(昭58. 3.31)
	浅井哲也	(昭59. 3.31)
事務局長	杉林嘉一	

お知らせ

○ 愛媛大学記念文庫について

昭和57年1月から昭和57年9月までの間にご寄贈いただいた図書は下記のとおりです。

一ノ瀬　篤
　国債管理とスタグフレーション　新評論　1980

城戸　正彦
　国際法　嵯峨野書院　1982

稲田　善紀
　海洋資源開発　土木工学社　1981

津島門下生
　一期一会　津島博教授退官記念事業会　1982

村上節太郎
　青島観光診断報告書　昭和55年　長浜町振興課　岸本印刷　1981

前田周一郎
　東論と量子論理　槇書店　1980

水野　信彦
　原色日本淡水魚類図鑑　保育社　1982
　河川の生態学　築地書館　1980
　日本の淡水生物　東海大学出版会　1982

○ JOISの利用状況について

昭和57年4月から9月までの利用状況

ファイル名	本館		医学部分館		合計	
	件数	時間(分)	件数	時間(分)	件数	時間(分)
JICST	18	102	5	30	23	132
JMEDICINE			10	62	10	62
MEDLINE			209	986	209	986
CA SEARCH	4	16	7	60	11	76
BIOSIS	6	63	4	31	10	94
CAB	1	7	1	3	2	10
TOXLINE			2	24	2	24

図書館利用証の発行について

附属図書館（医・農学部分館を含む）では、昭和58年４月１日から閲覧業務（貸出・返却等）をコンピュータで処理することになりました。

このため、新しく利用者ＩＤコードを付番した図書館利用証（図１）を発行いたします。

図書館利用証の交付は登録制にしますので、閲覧カウンターに用意している図書館利用証交付申請書（図２）によって、昭和57年11月30日までに申請手続きをして下さい。なお、４回生以上で来年３月卒業予定者は申請する必要はありません。また、**医学部・農学部**の専門課程へ移行した学生及び院生は、それぞれの分館で手続をして下さい。教官方につきましては、各人で申請手続きをする必要はありません。

図　1

図書館利用証

氏名

所属　　入学年度

愛媛大学附属図書館

図　2

図書館利用証交付申請書

昭和　　年　　月　　日

フリガナ			学生証番号
氏　名	㊞		
所　属	学部　　学科	身　分	入学年度　　年度
交付年月日	年　月　日	有効年月日	年　月　日
利用証番号			
フリガナ			
現住所			
郵便番号　　－	電話番号（　　）　　－		
フリガナ			
帰省先			
郵便番号　　－	電話番号（　　）　　－		

太枠の欄は記入しないこと。

愛媛大学附属図書館報「図書館だより」
第 14 号　昭和 57 年 11 月 10 日発行
発　行　愛媛大学附属図書館
松山市文京町３番
Tel 0899—24—7111